

災害を生き抜く人々の姿勢から チームが得た、大きな力。

1年の幕開けにふさわしい熱い戦い、箱根駅伝。第90回を迎えた今年も数々のドラマが生まれ、日本中に感動を届けてくれました。帝京大学駅伝競走部は総合8位入賞で、2年連続のシード権を獲得。このレースの裏に、駅伝競走部と伊豆大島の人々との隠れたエピソードがありました。伊豆大島は、強い風とその起伏に富んだ土地柄から、攻略が難しい箱根駅伝のシミュレーションに適した場所と言われ、多くの大学が合宿先として選んでいます。ところが昨年10月、台風26号の影響による豪雨で土石流が発生し、甚大な被害を受けてしまいました。そんななか合宿を取りやめる大学が相次ぎましたが、帝京大学駅伝競走部の中野孝行監督は例年通り合宿を行うことを決断。「決め手になったのは、島の皆さんが『待つてるよ』と言ってくれたこと。チームの状態がいいときも悪いときも、私たちが成長できたのは伊豆大島での合宿なんです。もちろん被害を受けた地域の活性化に、少しでも貢献できたらという思いもありました」。チームが伊豆大島に到着したとき、島民の皆さんが掛けてくれた言葉は「いらっしやい」ではなく「おかえり」だったそうです。

今年1区を走り、次期主将を務める3年生の柳原貴大さんは、お世話になった民宿の方に災害現場へ連れて行ってもらったときのことを振り返り、「復興に向けて頑張っている島民の方々に出会って、逆に僕らが元気をもらいました。箱根で結果を出すことが、温かく迎え入れてくださった皆さんへの恩返しになると信じて走りました」と語ってくれました。往路を12位で終えたチームに向けて、「望みを捨てたら駄目だ。最後までとにかく辛抱して、絶対に諦めるな」と中野監督は檄を飛ばしました。その言葉は、学生たちのなかで伊豆大島で出会った人々の姿と重なっていったそうです。そして翌日の復路では、粘りの走りで復路5位、総合8位という結果に。災害にも負けず、前へ進んでいる島の皆さんの姿が学生たちの意識を大きく変えたのです。「私は『一期一会』という言葉を実感しています。人生も駅伝競走も思ったようにならないことが多いのですが、なにか起こっても諦めずにベストを尽くすことで、良い方向に変わっていくものです」と中野監督。

伊豆大島での合宿を決行したことが、今回の結果に少なからず影響を与えたのかもしれませんが、たかさんの人々の思いが込められたたすきと共に、帝京大学駅伝競走部は来年も箱根路を駆け抜けます。

feel TEIKYO 
あなたにつながる帝京大学 撮影・加瀬健太郎

